

剣持勇と丹下健三

ここに展示されている no.81 《イーグチェア 5005》、no.80 《ペンダントライト》、no.84 《スツール S-302》の3点は、丹下健三設計の建築のなかで使用されたものです。

丹下と剣持勇は1951（昭和26）年、剣持が丹下も所属していた新制作協会の建築部会会員に推挙されたことをきっかけに交流を深めたとされています※1。

1958年に竣工した香川県庁舎（旧本館）において、丹下と剣持は初めてタッグを組みます。香川県庁舎は初期の丹下建築のなかでも代表的なものとされており、柱と梁の組み合わせが日本の伝統的な木造建築を想起させます。

《イーグチェア 5005》は香川県庁舎内の貴賓室で使用された作品です。当時、官公庁の建築には既製品を導入するのが一般的だったなか、丹下は剣持が庁舎の内装や家具デザインを担当できるように取り計らったとされています。

この仕事を皮切りに、丹下は剣持に自身の建築の内装を任せます。東京オリンピックをきっかけに竣工された国立屋内総合競技場（1964年）では、貴賓室前の廊下用に《ペンダントライト》がデザインされ、草月会館（1977年）では《スツール S-302》が使用されました。

1971（昭和46）年の剣持の死について、丹下は次のように語っています。「剣持さんのデザインは合理的な、バウハウスの線からスタートして、本当に日本人の風土や、日本人の心の中に定着させるようなデザインにまで発展させた※2」

ジャパニーズ・モダンを提唱した剣持勇と、日本の伝統建築をモダンデザインに昇華させた丹下健三。二人のデザインのバックグラウンドには常に日本の伝統文化や技術がありました。

※1 剣持勇「温い掌-丹下さんと私」『現代日本建築体系』第3巻 三一書房、1970年

※2 丹下健三「剣持さんのデザイン」『剣持勇の世界 第一分冊』河出書房新社、1975年